北熊(ノール)学舎

エイリアレル城で長の会が開かれていた頃。クワーレンたちは、鳥便に乗って、見習い村にたどり着いていた。

鳥便を降り、『顔寄せ亭』の主人のプェツアーが作ってくれた昼食を食べ終えた彼らは、学舎へと歩いた。玄関口(エテリセ)から学舎まで馬便(うまびん)で行きたかったが、所持金がもうなかった。イムサが作ったお金―逃亡用に〈野駆け〉の本を売って手に入れたお金―は、本当に六人分の運賃しかなかったのだ。

北熊(ノール)学舎は見習い村の北西にある。その間に広がる丘陵地帯を、彼らはいそいそと歩いた。白い曇天が頭上を覆い、その下を寒さでうずくまるようにして丘が連なっている。

クワーレンは、外套の隠しの中で手を握りしめた。手の中の紙は湿気で萎れ、柔らかくなっている。リトゥアーラからの手紙だ。彼女は、これを学舎長のハイズデヒ学舎長師に渡してほしい、と言った。「とりあえず渡しておけば、彼は事情を知ってくれるわ！」と、賑やかな眼鏡の彼女は言った。そう、村回りを途中で切り上げることになった事情を……。

背を丸め、首をすくめて歩く見習いたちの上から、申し訳なさそうにして、また雪が降りはじめた。

クワーレンたちは、先を急いだ。

「あ……！　ねえ、あれじゃない？」

そう言って前方を指したのは、マウリンだった。見習い帽から覗く二つ結びの髪が肩の上で跳ねる。

色の失われた冷たい丘の向こうに、赤い小さな三角錐が見えた。足を進めるにつれて、それは地面から生えてくるように、徐々に姿を現した。

赤い三角錐は、石塔の屋根だった。石塔は、絡まる蔦に覆われて染みだらけに見える石造りの建物からのびている。ほとんど黒のようなの木々が、その足元をしっかり隠していた。

もっと下っていくと、門が見えはじめた。大きく広がった枝葉が、道に屋根をつくっている。クワーレンたちは我先に駆けた。

アベド五人分の高さはあるだろうか。黒いひし形で組まれた門扉、その中央には、『北』を表すエイネー文字が刻印された飾りが、威嚇するようについている。両側の門柱には、前足をあげて互いに向かって吠える獣が浮き彫りされていた。北熊（ノール）だ。北熊（ノール）は、首が長くて、白い目と毛皮をもった熊のことで、ここの学舎の象徴だった。白濁して輝く石の目が、こちらを試すように見つめる。剥きだしになった犬歯が、小さな見習いたちの心を、誇りと緊張で鋭くさせた。

ガィン！と耳障りな音が響き、一同は首をすくめた。マウリンが門扉をゆすったのだ。だが、門扉はびくともせず、平然と彼らを見下ろした。

「閉まってる！」マウリンは嘆いた。

「そりゃあそうよ。きっと授業中だもん」リリが腕を組んで、当たり前だと頷く。

「どけ。俺がやる」チャルーがマウリンを押しのけ、門に手をかけた。

「……別の入り口があるかもしれない」イムサはふらりと離れ、外壁を見に行った。

『……別の入り口があるかも～』……ふん。勝手にしやがれ」

チャルーはイムサの口調をまねし、力づくで門扉を揺らした。だが、動くのはチャルーのほうで、重たい門扉は小石一つ分も動かなかった。

「君の腕がひきちぎれちゃうよ」クワーレンは、チャルーの肩に手を置いた。

「ふう、枝をよこせ」

チャルーは無視して、クワーレンに見習い帽子を預けた。代わりにクワーレンは、その辺の枝を渡した。

汗をぬぐうなり、チャルーは、何をするかと思えば、格子に枝を突っ込み、激しく振った。騒音があたりいっぱいに響いたが、どれだけ続けても、誰一人来なかった。

「もう登るしかないよ！向こう側に降りたら、あたしが開けてあげる！」マウリンは格子に足をかけ始めた。

すると、エネーリスが彼女を止めた。「誰か来るわ！」

門の向こうから、一人の見習いがやってきた。その背格好が誰かとそっくりだったので、彼らは、あっと声をあげた。

「イムサ！」

「どこから入ったの？」

みんなは訊ねたが、彼は答えず、こう言った。

「今から門番が開けてくれるって」

その通り、彼の後ろから、やせた老人が駆け足でやってきた。開錠しながら、門番は言った。

「新一年、新一年か？村回りがもう終わっただなんて……、ちと早すぎるんじゃないか？　どうやって回ったんだ」

敷地内に引き入れると、彼は首を伸ばして見習いたちの後ろを見た。「師の人はどうした？」

「えっとその……、話すと長くなります」

ぼそぼそ言ったクワーレンの脇から、イムサが堂々と前に出た。

「師の人とはで別れました。修了書は持っています」イムサの言い方は隙がなかった。「入れてくれるんでしょう？」

管理人は、ちょっと気味悪そうに見習いたちを眺めると、学舎へ案内した。

まっすぐに延びる煉瓦の道の上を、木の葉が覆っている。進むにつれ、木々たちは煉瓦の道から距離をとり、周囲は明るくなったが、代わりに、ぼうぼうに生えた芝が、道の端から物を乞うように、緑の長い手を伸ばしはじめた。

右側に胸像が並んでいた。歴代のだと、門番は言った。一人は肩が欠け、一人は頭がなくなっており、地面に倒れているものもあれば、台座にいないものもある。体が全部そろっていても、顔が蔦や葉に覆われ、目鼻が分からない。完璧な姿で残っているものは、ないに等しかった。

やがて、大きな噴水が目の前に現れた。見習いが二十人手をつないでも囲みきれないほどの大きさだ。噴水のてっぺんでは、北熊（ノール）が咆哮している。本来なら、あの口から水が出るのだろう。しかし、今は水のかわりに苔が溢れていて、まるで海藻を食べているように見えた。

噴水を回りこみ、ようやく、灰色がかった石造りの校舎にたどり着いた。真四角の幅広い肩の端に、遠くから見えたあの赤い三角錐屋根の円柱が乗っている。巨大な岩に小さなろうそくを立てたような、ちぐはぐな姿だ。屋上には、怪物の朽ちた歯のような突起が、ずらりと並んでいる。へこんだ丸い窓、さらにその下に、馬鹿みたいに長く口を開けたような窓と、引き出しのように突き出た小さな出窓。この建物は三階建てのようだ。出窓の下からは、くすんだ白地に青で描かれた、北熊（ノール）の紋章の布が垂れさがっている。

「師の棟だ。北熊（ノール）の師の人が集まっとる」門番はしわがれた声で、単調に言った。

師の棟は、年老いた門番よりも、さらに比べ物にならないくらい年を数えているようで、その朽ち方は、沈黙を貫く巨大な化け物と言ってよかった。化け物は、通り過ぎた学舎長たちと同じように植物と一体化し、雑然を通り越して物恐ろしくなっていた。

「リトゥアーラの住んでいる三百年前の家よりも、もっと古そう」げんなりした様子で、エネーリスが言った。あの蜘蛛の巣だらけの階段を思い出しているのだろう。

「歯の磨き方を最後まで思い出せなかった老人の口の中みたいだ」チャルーが呻いた。

門番は、彼らを怪物の口へと案内した。いかにも偉そうな、大きな両開き扉だ。むっつりと押し黙ている。門番は、壁から突き出ている輪が付いた棒を、がくん、と降ろした。

上の方で、がらがらと回転する音がし、怪物は仕方なくも、重々しく口を向こう側に開けた。門番は、すり切れた靴底をまたすり減らすようにして入った。かび臭いだろうと覚悟していたクワーレンだったが、すぐに、それが必要ないことがわかった。

最上階まで見通せる吹き抜けに、白い手すりが縞模様のようになって、四角く頭上を囲っている。天井からは、雫型の照明が光を垂らし、様々な高さでぶら下がっていた。床は輝かしく磨かれたの石だ。濃い紅色の含有物が枝のように広がっている。見下ろしたクワーレンの顔が、そこにはっきりと映った。

右奥には、向かい合った長椅子が二十ほど置いてあり、中央に硝子の机が置かれている。その向こうには背の高い窓があり、外の生い茂った緑が見えた。

正面に目を戻すと、建物の反対側に出る扉があった。正規の扉と比べると少し質素だが、それでも大きさは、クワーレンたちの三倍はあった。その扉を挟むようにして石柱が立ち、アベドの肖像画が掛かっている。肖像画は、棒に長い布を巻き付けて、絵の描いてある部分だけを垂らして飾ってあった。

息をのむ見習いたちをよそに、門番は、ぺたぺたと、左側の壁にある小窓に近づいた。小窓の下には、つるつると光る、物を書くための簡易な出っ張りがついている。小窓の上には、金の文字で『応対窓』と書かれていた。門番は、応対窓の向こうに話しかけた。

「え？　なんですか？」

そう言って乱暴に窓から顔をのぞかせたのは、白髪を生え際で土手のように盛り上がらせた、短気そうな女だった。

彼女は年配だったが、髪には艶があり、手の抜きがなかった。どうやら髪は後ろで結われているようだが、窓の向こうにいるので全容は分からない。黒く長い眉がきりりと吊り上がり、年のためにくぼんだ目からは、視界を横切る羽虫でさえも刺殺さんばかりの鋭い光が放たれている。

彼女は、おじおじしている門番を見、さらに見習いに顔を向けると、まるで猿でも入ってきたかのような目つきをして、彼らを頭のてっぺんからつま先まで、さっと一通り見た。

門番が言った。「村回りを終えたって……」

白髪の女は、しかし、彼を無視して、直接クワーレンたちに訊ねた。

「あなたたち、村回りを終えたの？」

言葉の一音一音が、氷の礫となって見習いたちに向かった。

「はい、終わりました」エネーリスが、顔を固くしながらも、はきはきと答えた。

「じゃ、入って。こちらに来て。修了書を見せて」白髪女は、はやく、と顎を手前に引いた。
修了書を持っていたクワーレンは、わたわたしながら、白髪女に差し出した。彼女は、首に下げた老眼鏡で修了書を確認すると、次の段階に移るためにさっと老眼鏡を落とした。胸の前で眼鏡が揺れる。
「よく学べた？」
眼光に萎縮してクワーレンが詰まっていると、脇の書類に手を伸ばしていた白髪女は、じろっと睨んだ。
「ええ、すごく！」クワーレンは辛うじて言った。
だが、女は聞いていなかった。激しく、堂々と、圧力をかけて、書き物をし始めていた。
「名前を言って。順に」彼女は言った。
「マウリン！」咄嗟にマウリンが手をあげた。
「どこで、いつ、生まれたかまで、ちゃんと」白髪女はその力強い筆跡と同じように、一単語ずつ、力を込めて言った。
一同が彼女の要望通りしっかりと名乗りを終えると、白髪の女は、窓の後ろに引っ込み、しばらくいなくなった。
……と思いきや、応対窓の向こうからこちらに出てきた。後ろを向いて、誰かと話している。
「ええ、こちらですよ。もう来ているんです」
やって来た白髪の女は、背中に針金でも入っているかのように、ぴんっと背筋が伸びていた。おかげで、あまり背が高くないにもかかわらず、威圧感があった。見習いたちは、しばし見とれた。先ほどまで見えなかった、後頭部から生える角のような筒型の髪留め、そこから流れる白髪、そのどちらも美しかっ

たからだ。
対照的に、背が丘のように丸まった、杖を突く老人が、彼女のあとからやってきた。クワーレンたちより頭一つ分小さい。染みだらけの腕や、目やにのたまった皺、こめかみにとまる大きなほくろは、干し葡萄のようになっている。後退した白髪も揺れる白髭も、四方八方に伸びて、つんとする植物的な匂いがした。彼は、重たく伸びた白い眉毛をひょいと持ち上げて、見習いを見ると、よたよた近づいた。
「……よ、ようこそ。北熊（ノール）学舎へ」彼は、歓迎の意を示して、腕を横に伸ばした。
「……あの、えっと、……あなたは？」リリが、女の視線を気にしながら問うた。
「ハイズデヒ学舎長です」
女が老人の後ろから声高に言った。軽蔑を含めた目で、老人を見下ろす。
ハイズデヒ学舎長は、喉の奥に何か詰まったような笑い声を漏らした。
「そうだ……そうだ。名前を……ひひひ……名前を言うのを、忘れとったよ」
「ハイズデヒ学舎長、教室への案内は？」
「え？　……ああ、わしがやる。わしがやるよ。……ああ！　ギュグリンブ師」
ギュグリンブ師と呼ばれた女は、すでに角を曲がって去ろうとしていた。彼女は呼ばれるや、鷹のように、きっ、と振り返った。
「あのう……あれを、用意しといてくれないか……あのぅ……なんだったかな……」
「見習い証ですか」
「そうそう、それ」ハイズデヒ学舎長は、またひひひと笑った。「年取ると……

年取ると、すぐに、忘れちゃってな……」
彼は、かけた歯を見習いたちに向けた。その間に、ギュグリンブ師は颯爽と去っていった。
「あの、ハイズデヒ学舎長……」
クワーレンは、今だろうと思って、冷たく湿った手紙を隠しから取り出した。
「これを渡してくれと、リトゥアーラ師から言われました。あの、僕たちがこんなに早く来た理由が……」
ハイズデヒ学舎長は震える手で受け取った。クワーレンは不安に思った。学舎長は目を細めて宛名を眺める。すると彼は、すぐさまクワーレンに押し付けるようにして戻した。
「え」
「開けて、読んでくれんか。字が、字が見えなくてな」
イムサが、二人の間に割り込んだ。
「これ、大事なやつなんです。ほらここ、あなた宛てに『親展』って書いてある、赤字で。だから、あなたが開けて読まないとだめなんです。俺たち、読むな開けるなって、差出人からくぎ刺されているんですよ」
「だが、わしは、開けてよいと言っているぞ。字が……、字が見えないんじゃよ」
咳払いが聞こえた。応対窓から、ギュグリンブ師の氷山のように厳しい顔がのぞいていた。
「もしもし、学舎長。手紙は、その子たちの案内を終えてから、こちらで読んだらいかがですか？　眼鏡をかけて」
ギュグリンブ師は、ハイズデヒ学舎長のもつれた白髪に埋もれたあまり働かない耳に届くよう、はきはきと言った。

学舎長は、ぶるぶる震える手紙をしばらく眺めたが、「ふむ」と言って、隠しにゆっくり入れた。

「いまわしは、右の隠しに入れた」彼は確認するように呟いた。ギュグリンブ師は瞬きせず、じっとハイズデヒ学舎長を見ている。それから、「では、案内しよう！」と、学舎長が杖を突いて歩きはじめると、彼女はやっと窓の向こうに消えた。

ハイズデヒ学舎長は、正面とは反対の扉へ見習いたちを連れていった。この大きな扉に学舎長は敵うのかとみんなは心配したが、彼は慣れた手つきで扉を力いっぱい押し開け、見習いたちを安心させた。

すっと延びる一本の白い砂利道。左右は芝で覆われ、曇天の下で静かにそよいでいる。中央には針葉樹をかたどった金属の記念塔があり、そこから放射状に、学舎のあらゆる方向へ道が分かれていた。クワーレンたちは、曇り空を背景に青銅色の枝を伸ばす、針葉樹の記念塔の尖った先っぽを眺めながら、ハイズデヒ学舎長についていった。

「右にある、弧を描いた屋根が見えるかね。右の道をさっと行ったところじゃよ、煙突がある……あそこが食堂じゃ。そして左の建物—そう、ちょっと枯れた蔦が絡まってる、灰色の石の建物じゃ。あれが、四年生から五年生……あいや、間違い、六年生までの教室じゃ」

ハイズデヒ学舎長は、ざっくばらんに説明した。

「このまま、まあーすぐ行くとな、ええと、……図書館、図書館がある！結構でかくてなあ、ひいひい」学舎長は欠けた歯を見せて笑った。「ほんと、すぐに、迷子になっちゃうんじゃよ。何回もな」

後ろでリリが「ここはもうすぐ終わるわね」と、ぼそぼそ呟いた。エネーリスが「ちょっと」と肘でつつく。

「で、あそこが、うーんと……実習棟じゃ！」
ハイズデヒ学舎長は、萎びた脳を一生懸命回転させて、左奥の木々に隠れている建物の名前を思い出した。
「あすこは、あのう、舞踊とか、体術とか、飼育とかを行っている場所なんじゃ。一年生はあまり使わないな。……そうそう、用がなければ、近づかないことじゃよ」
「どうして！」マウリンが叫んだ。「楽しそうなのにっ」
するとハイズデヒ学舎長は、目をひん剥かせて一言、「あっぶないからじゃよ」と言った。
「ええ、そう、あっぶないですからね！」チャルーが真似して頷く。
その後、ハイズデヒ学舎長は、食堂の奥に立つ、丸みを帯びた建物に案内した。
「ここが、ええと……、一年生から四年生までの校舎じゃ」
「あの、さっき、四年生から六年生が、あっちの校舎だとおっしゃいましたけど」エネーリスが、校舎への階段をよたよた上る学舎長に言った。
「え、そうか？……ああ、そう、ここは三年生までの校舎じゃった！　ひひひ、こりゃ失礼！」
校舎の中は薄暗かった。アベドがいる気配がなく、建物内は閑散としている。
「一年生の授業は、はじまっておらんくてな。なにせ、こんなに早く村回りを終える子たちがいるとは聞いとらんかったから」
クワーレンたちは目を合わせた。
「それに今日は……、休日なんじゃ。誰もおらん。……ふむ、はてさて。これからどうしたものやら……」
ハイズデヒ学舎長はぼそぼそ独り言をいいながら、一階を歩いた。教室は廊

下の右側に作られていたが、たしかに、どこにも見習いの姿はなかった。開いている戸から見える教室は静まり返り、椅子だけがじっと教卓を見つめている。
「一階が一年生の教室なんじゃ。下から、一、二、三、ってな。ひひひ。分っかりやすいじゃろ？」
「分っかりやすいです」
チャルーがまた言った。そんな彼の腕を、リリが笑って叩く。
ハイズデヒ学舎長は、その無言で、廊下をゆっくりと歩いた。ついに行き止まりにくると、そそり立つ壁に困ってしまったかのように、こちらを振り返った。
「さあて、見終わってしまったなあ。……じゃあ、ええ、わしは階段が嫌いなんでねえ、なんせ、ひっひい、年だから、ひいひい！　二階を案内してやりたいが、また今度な」
学舎長は一息ついた。すると突然、何かを思い出したようで、歯の少ない口をぱかっと開けた。
「そうじゃ、こっちこっち」
彼は杖を振り回し、できる限りの早足で、来た道を戻った。針葉樹の記念塔を過ぎ、師の棟へ入る。学舎長は、赤い皮椅子が置いてある方に、見習いたちを連れていった。
「なに、ここ。休憩所？」チャルーが皮椅子の背に触れて言った。
「ま、まあ、休憩所としてももちろんじゃが、まずはこっちじゃ、こっち」
学舎長は突き当りの壁に向かった。一面に巨大な板がかかっており、大量の貼り紙がされている。
「わあ、なあに、これ？」マウリンが言った。
「お、お、お前さんたちは、あれじゃろ、見習いだからな、えへん、だからこ

う、いろいろなものが無償で提供されるわけじゃて。教科書も、見習い服も、食べることだって……あー、北熊（ノール）の学領内に住む者なら、ここの食堂で食べられるんじゃよ、そう食べられるんじゃ。知っておるだろう？」

ハイズデヒ学舎長は、言葉を思い出そうと、時折手を振りながら説明した。

「ということは、無料で食べられるってことですねっ？」チャルーは強く確認した。

「そうじゃよ」ハイズデヒ学舎長は、慇懃に頷いた。「北熊（ノール）の者を飢えさせるわけにはいかないからな」

この時だけは、ハイズデヒ学舎長は、頼もしく見えた。

「だが、市は論外だて。あすこは学領が混じるところだから、学舎の保護下にはあたらん。だから、そう、商の人とかが出入りして、君たちからお金を貰うことが許されておる。い、い、い、行ったかね、もちろん、市の方に？」

「行きました、村回りのはじめに」エネーリスが丁寧に答えた。

「うんうん、あすこじゃ、まだ金を持たない君たちは、見てまわるだけだろうて。……で、ここの貼り紙だが、うん、そんな見習いのために、仕事じゃな。簡単な仕事の募集が、ここには入ってくるんじゃ。どうせ、みんないつか働く。しし、仕事人としてな。だから、ちょっとした小遣い稼ぎになればと思うて……」

「ああ、なるほど。これが小遣い稼ぎのやつだな！　金が貰えるやつだ！」

歓声をあげるチャルーに、ハイズデヒ学舎長は、勝ち誇ったように笑った。

「ひひひひひい、わしが、わしが、わしが考えたんじゃよ。この制度は」

「え、学舎長が？」思わずみんなは叫んだ。

ハイズデヒ学舎長は、その反応に、もっと笑いがこらえきれなくなって、自

信満々に言った。

「ひいひいひひ、いいじゃろう？　これでお前さんたちは少しでもお金を貰えるし、しし仕事人も、ちとばかし助かる。ひひひいひい、素晴らしい考えじゃろ？　名前は、お手伝い板。八十年前に、ここの学生だったわしが考えたんじゃ！　それが、いいい、今でも続いてるんじゃわ！　ひひひいひい」

見習いたちはそれから、ハイズデヒ学舎長を少しばかり見直したし、今は何歳なんだろうと思ったりした。

「やりたい仕事があったら、この紙をもって、ギュグリンブ師のところに行くんじゃ。許しが出たら、印鑑を押してもらい、その仕事へ向かう。いろいろあるぞ……」ハイズデヒ学舎長は、楽しそうに言った。

クワーレンたちは、それぞれ、掲示されている募集の数々を眺めた。

●学舎の馬小屋掃除

馬小屋の掃除。草を掃いたり、を掃いたり。匂いはご愛嬌。馬に興味のある見習いはぜひ。

時　　朝食前と放課後

賃金　一日１７０ミル

備考　雇う見習いは一週間で交代です。馬好きは必見

担当　師の人　動物学　ベロイユ　詳細は私のところまで。

●教科書仕分け

見習い新一年生のための教科書を個別に分けるお仕事です。

時　　花の月　８日　備品庫にて

賃金　１００ミル

担当　師の人　言語学　アマキン
備考　丁寧なアベドさんを募集します。募集紙は人数分重ねて掲示するので、一人一枚持って印鑑を押してもらってくださいね。休憩にお菓子つき。

●急募！　舞台子役！
花の月　十日の日暮れから行われる劇、『踊るきのこと三人の婦人』の、泣き叫ぶアベドの子ども役を募集中！　ただ泣いて騒ぐだけ！　珍しい仕事、すぐに高額収入を得たいアベドはぜひ！　一人限定！
出演料　３１０ミル
担当　つくりの人　歌う薔薇劇団　団長　アクユ
備考　劇団は、見習いの時、同じ番地だった奴らと組んで、趣味でやっています。和気あいあいとした感じ。実力は問わねえぜ。
追記　誰でもいいから誰かやらねえか……！　今からなら３２０ミルに値上げ！

●『緑黄色商店』の休日品出し　募集
自然の村から届く野菜を店先に並べる仕事。実際に商の村の店で仕事ができます。掃除もお任せするかも。
時　休日早朝　日の出前集合　一週間
賃金　一日２００ミル（経験者は２３０ミル）
担当　商の人『緑黄色商店』店主　ケールタム
備考　交通費の支給はありません。仕事しながら商の村を楽しみたいって子はぜひ。朝食はおごります。

クワーレンたちは、募集用紙を興味津々で見ていった。チャルーはしかし、険しそうな顔をして、下唇を指先ではじいた。

後ろから、ハイズデヒ学舎長が言った。

「まあ、賃金は高いとは言えんがな。しかし、まだ若い君らには、これは仕事じゃのうて、お手伝いとして成り立ってるんじゃ。正直言って、これは学業とは別の、おまけじゃからな」

クワーレンは、ハイズデヒ学舎長を振り返った。小さな学舎長は頷いた。「そう、学業の方が優先じゃ」

「……でも、これをやれば、お金を貰って、好きなことに使えるんですよね」

クワーレンはたまらず訊ねた。

学舎長は、大きく素早く首を縦に振って、隙間だらけの歯を見せた。

「もちろん。自分で考えて、実行し、実際に成果を得るというのは大事じゃ。ひいひい……そう、それを思って、わしはお手伝い板を作ったんじゃよ。ひひひ、だが、あくまでも、おまけなんじゃぞ」

学舎長は笑いながら、おまけであることにくぎを刺した。

そこへ、重く、大股で歩いてくる足音が近づいた。

「ハイズデヒ学舎長」

やってきた男は、呼びかけた後、ちょっと身を引いて、六人の見習いたちを眺めた。

「……おや、新一年ですか。早い」

その動作に無駄はなく、かといって急いだ感じもしなかった。自然な勇ましさと、どんな物事にも応じるゆとりが、彼の周りを取り巻いている。肩幅は広く、自然と胸を張り、焦げ茶の髪の毛を後ろへ流した小さな逆三角形の頭は、まるでナクーのようだった。高い頬骨も、太めの眉も、ゆるぎない強さを感じ

させる。
「ステラゥル師、何か用かね？」
背の曲がった小さな学舎長は、ナクー顔の師の人を見上げた。二人は見習いから少し離れ、事務的な話をはじめた。ハイズデヒ学舎長は耳が遠いようで、何度もステラゥル師の説明に、「ん？」と訊ねた。ステラゥル師は、根気よく説明した。
「……じゃ、じゃ、これは、わしが印鑑を押せばいいんじゃね？　……うんうん、ああ、分かったよ。ちょっと印鑑の場所が分からんからな、ギュグリンブ師に聞かんと。いひひひ。どうもだめでこのところ、ひいひひひ」
ステラゥル師から書類を受け取ったハイズデヒ学舎長は、杖を突き突き、応対窓へ向かった。その時、コーン、コーンと、高く澄み渡る鐘の音が響いた。
「おお、その子たちを食堂に連れていってやってくれないかね。もうちょうど、そんな時間だ」ハイズデヒ学舎長は振り返って、ステラゥル師に言った。
ステラゥル師は、一瞬困惑の色を見せたが、すぐ見習いたちに体を向けた。
「来なさい。食堂へ案内しよう」
近くで見ると、ステラゥル師はかなり背が高かったし、こけた頬や目尻の皺から、もう年（とし）であることがうかがえた。それでも、太い眉の下の目には、はっきりとした強さがあった。
見習いたちは、さっそく歩き出したステラゥル師に急いでついていった。彼は厳しそうだったが、応対窓のギュグリンブ師とは違って温かみを感じた。ギュグリンブ師が氷山だったら、ステラゥル師は大地だ。
「この鐘は終業の合図だ。今日は休日だが、これは夕食前の軽食がはじまる合図でもある。だから、いつでも鳴るのさ。平日では一日の授業が終わると、見習いは食堂で軽食を取り、その後、夕食を食べる。軽食は、ほとんど菓子だか

らな。もちろん、家へ帰って食べてもいいし、村にある店に行ってもいい。だが、普通、一年生は食堂で食べる者が多い。なかなか家で作って食べるというのは、難しいことだからな。それに、家のかまどを使うには、必ず、かまどの試験に合格してからでないといけない」

中庭に出ながら、ステラゥル師は歯切れよく説明した。師の白い外衣が、見習いたちの前で広がる。

雑木林の蛇行した道を歩き、ようやく食堂が見えてきた。弧を描く青い屋根に、金の骨組み、くすんだ白の石積みの食堂は、今まで見てきた味気ない校舎と比べて、可愛らしさがあった。

「正面に両開きの扉が三つ、開いているのが見えるだろう。あれが、食堂が開いている印だ。今日はここで食べていくといい。送迎の馬便は、馬便用の鐘が鳴る。終業後五回、迎えが来るが、逃すと帰れないぞ。馬便の発着所は、門を出たところだ。まあ、見習いたちが集まるから、迷わず見つけられるだろう」

ステラゥル師は、説明に一区切りついたことを示すために一つ頷いた。「何か質問は？」

マウリンが勢いよく手を挙げた。「授業はいつですか！」

「見習いが揃ったら、本格的にはじめる。それまでは、まあ、学舎のことでも知ってもらおうかな」ステラゥル師は、ゆっくりと、短い顎髭を親指でなぞった。

「あの、次はいつここに来たら……？」リリが言った。

「明後日、迎えの馬便が家に行くはずさ。御者が君らの家の戸を叩くだろう」

その間に、どこからともなく見習い帽子をかぶったアベドたちが現れ、続々と食堂に入っていた。先輩見習いたちだ。いったい、彼らはどこにいて、いつの間にやって来たんだろう。だが、入り口から良い匂いが漂ってきていて、そ

れどころではなくなった。焼き立てのポウや、牛酪を入れたフーラッカン、砂糖菓子の甘い香りがする。

「他に分からないことがあったら、いま集まってきた上級生の見習いに聞くといい。私は、師の棟にいるから、何かあったら、歴史学のステラゥル師、と呼んでくれ。すぐに向かうよ」

そして彼は、外套を翻し、もと来た道を戻っていった。

「あのアベド、年取ってるけど、かっこよくないっ？」

「マウリン、一言余計じゃない？」

「あら、そんなところ見ていたの？」

少女たちは、けらけら笑って、互いを小突き合った。

食堂は、開いてすぐでも賑わっていた。弧状の屋根の下で、食器の物音が楽し気に反響している。天井には、魚や海獣を追いかけている白い毛皮の熊が描かれていた。屋根を支える木骨が骨のように見え、まるで何か大きな生き物の腹の中にいるようだ。

食事の席は壁側に並んでおり、真ん中に食べ物が並ぶ長机があった。すでに何人かが集まって、並んだフーラッカンを取ったり、山のように積まれたポウを吟味したりしている。

「はっ、全部無料！」

チャルーが思い出したように叫び、一番に駆けだした。彼はポウの山に近づくと、入るだけ隠しに入れた。入りきらなくなると、今度は口にくわえ、次に両腕に抱え込んだ。食べきれなくても、残った分は持ち帰って貯めておくこともできる。そう彼は考えたのだ。

クワーレンもなるほどと思い、ポウの山に手を伸ばした。焼き立てのポウからは、小麦の甘い匂いと、温かさが伝わってきた。

だがそこで、近くにいた見習いたちが笑った。クワーレンは、さっと手を引っ込めた。
彼らは上級生で、来たばかりのクワーレンたちを見下ろしていた。一人はフーラッカンを齧り、一人は手を隠しに突っ込み、もう一人はポウを一つ、片手に持っている。
「馬鹿だなあ、お前」
ポウを持ったのっぽの少年が、必死になっているチャルーに言った。
クワーレンは、その少年の顔と、かさついた声を、どこかで見聞きしたことがあるように思えた。
「お前、ここにいたかったら、自分思考をやめた方がいいぜ。集団の中じゃそういう奴は敵に回される。そのポウよりも先に食われるぞ」
のっぽ少年は、ひょいっと片方の眉を上げ、周りを見るよう、頭を傾けた。
見渡すと、ポウの山をどんどん崩していきかねないチャルーやその仲間たちに向かって、刺さんばかりの敵意と不安の目が注がれていた。
チャルーは、無言でポウを山に戻した。隠しに入れたものも、全部出す。彼は、最後、口にくわえていたポウだけ、気まずそうにゆっくりと齧った。
「一年だろ？　俺はカリュー。ようこそ、北熊学舎（ノール）へ」
カリューはそう言って、和解を示すべく、拳を縦にしてチャルーに差し出した。クワーレンは、そこで思い出した。見習いの式のあと、村へ送られる途中にいた縞々喇叭を吹く少年、御者のグーマーにちょっかいを出していたあの少年は、たしかにこのアベドだった。
チャルーは、カリューを見、拳を見ると、彼の求めに、おずおずと応じ、横にした拳で触れた。
食堂の緊張が、一気になくなった。カリューの仲間たちが拍手をし、調子よ

く口笛を吹く。カリューは乗じて、丁寧にお辞儀をした。クワーレンは、思わず彼に畏敬の念を覚えた。カリューの見習い服は汚れていたし、日々の活発な動きによってくたびれていたが、声を荒げることなく場をまとめることができるその能力は尊敬に値した。チャルーも、彼の悪意のない笑みに、恥じと怒りの感情が消えてしまった。

カリューは、ポウとフーラッカンを一つずつ取ると、「じゃあな、食いしん坊」と言って、食堂を出ていった。

クワーレンたちは、それ以降、自分が食べる分だけ取るよう意識した。そうして、窓際の六人掛けの席につき、軽食にした。

軽食が済むと、食堂や中庭をのんびり見てまわった。中庭は広く、先輩見習いたちが集まって談笑したり、寝そべったり、追いかけっこをはじめたりしても、まだまだ余裕があった。そして、夕食の鐘が鳴ったときにまた食堂に戻ると、今度はルードルの照り焼きやアブシュの肉団子、リルク（青魚）の揚げ物、胡麻入りのポウに、かぼちゃの汁、胡桃と蜂蜜の焼き菓子や、林檎飴などが長机に並んでいた。

『敬意を君は食べる。貪欲は君を食べる』

クワーレンは、天井にいる北熊（ノール）の頭あたりにそう書かれているのを、食事中に見つけた。

食後、単調な鐘の音が響いた。見習いたちがぞくぞくと学舎の門へ向かっていく。迎えの馬便が来たようだ。無事にに乗ると、クワーレンたちは久々に３０１５番地に帰ってきた。

自分の寝台でゆっくりできることをうれしく思いながら、クワーレンは手に

入れた見習い証を眺めた。帰り際にギュグリンブ師が渡してくれたのだ。「絶対に、なくさないように」彼女は、それぞれの手のひらに跡をつけんばかりに押し付けながら言った。

見習い証は、金属でできたひし形の記章だった。左を向いた北熊（ノール）の顔が描かれていて、周りを青の帯が囲んでいる。帯には『１５４０年　北熊（ノール）学舎』と書かれていた。後ろには針が通っていて、見習い服につけられるようになっている。クワーレンは、今日はいったい何匹の北熊（ノール）を見たことだろう、と思った。

だが、これで学舎の見習いであることが認められたのだ。誇らしいが、村回りを正式に終わらせていないことを考えると複雑な気持ちだった。

誰かが部屋に入ってきた。チャルーだ。チャルーは鼻歌を歌いながら、二つ持っていた硝子のホルトを一つ、クワーレンに差し出した。金色のペニャッツ酒が入っている。

「言っただろ？　フロリラが送ってくれるって」自分の寝台に座って一口飲むと、チャルーは言った。

「ああ、そういえば！　なんだかだいぶ前のことに思えるな」

チャルーは見習いの式が終わったとき、〈育ての者〉のフロリラからペニャッツ酒が送られてくる、とクワーレンに言ったのだ。つい六日前のことだが、すっかり忘れていた。

ペニャッツ酒を一口飲むと、柑橘の爽やかな香りが鼻腔いっぱいに広がった。いつ飲んでも、ペニャッツ酒はおいしかった。

「お前のも届いてたぞ。でけえ煉瓦を頼んだのか？『重いっ！』って、マウリンが文句言ってたぜ」

クワーレンはそれを聞くや、一目散に階段を降りた。

玄関の傍に、包みがいくつか置かれていた。みんなが見習いになる前に、届けてくれるよう〈育ての者〉に頼んだものだ。一つはびりびりに引き裂かれて空っぽだ。チャルーのペニャッツ酒だろう。もう一つ破かれているものがあって、中の木箱が飛び出していた。木箱の中身は……何もない。

クワーレンは、一番小さな包みを拾った。その重さがあまりにもなじみがあるものだったので、彼は嬉しく思った。ピクランタはちゃんと『尾骨獣の大戦』を送ってくれたのだ。下に、ふかふかするものが入っている。不思議に思いながら、クワーレンは階段を上がった。

すると、目の前に猫の顔が現れた。

「ねえ！　見てこれ、ほら！」

マウリンがぬいぐるみを突き出していた。猫の体は蛇のように長く、七色をしている。背中にぺらぺらの翼が生えており、マウリンがゆするたび頼りなく揺れた。

「かわいいでしょ！　首にも巻けるんだよ。ああ～、愛しいあたしの相棒！」

「なんて名前？」

ぬいぐるみを首に巻き付ける彼女に、クワーレンは訊ねた。「ナラナラ！」マウリンは叫んで自分の部屋に戻っていった。

クワーレンも自室に戻ると、チャルーが言った。

「〈虹の猫（ヤークァナラ）〉の人形を見せられただろ？」

「ああ、ナラナラ？　うん」

「全員に見せびらかしてるんだ。俺、首に巻き付けられたんだぜ。『きもい』って言ったら絞め殺されそうになった。クワーレンも気をつけろよ」

チャルーは、ホルトを寝台脇の棚に置いた。「刈り上げ野郎はまだ外か？」

彼のいう刈上げ野郎とは、イムサのことだった。イムサは帰ってきてから落

ち着きがなく、雨が降り始めたにも関わらず家の周りを歩き続けていた。
「あれじゃ、不審者とかわりねえって」チャルーは言った。
「自分の敷地内だから、散歩とかわりないよ」とクワーレン。
チャルーは、やれやれというように、寝台の上でくるりと受け身をして、向こう側に立った。クワーレンは、その間に包みを破いた。『尾骨獣の大戦』、その下に、太陽の季節用の見習い服が丁寧に折りたたまれていた。かさばっていた理由はこれのようだ。彼は、見習いが半袖であることを確認するとその辺に放り、『尾骨獣の大戦』を撫でた。
砂漠の表紙が、保育部屋を思い出させた。ピクランタ、かぼちゃ、ガルド……、彼らはいま、どうしているだろう。破いた包みを手に取ると、裏に文字が書いてあったことに気づいた。手紙だ。
「ピクランタっ、包みに書くなんて！」
「なんだ？　バダク（ばらばらになった絵や人形を組み立てる遊び）か？」紙片を合わせるクワーレンの隣に、チャルーは座った。
「違う。手紙だ」
寝台の上で組み立て直される手紙を、チャルーは首を傾けて覗き込んだ。
「ずいぶん書いてあるな。お前を試しているのか？　それとも、ただの間抜けか？」
ピクランタは僕を試すようなアベドじゃない、と言いたかったし、間抜けだとも言われたくなかった。だが、手紙を見た瞬間、ピクランタの温かい声が聞こえてきて、求めるように言葉を追った。
「ナッシュへ
元気かい！　もうナッシュって名前じゃないんだろうな。見習い村はどうだ？

友達はできたか？　こっちは忙しくてたまったもんじゃない。新しい子どもが来る準備で、てんやわんやだ。毎日どこかの保育部屋の大掃除をしている。だが、セイダが言うには、来月の誕生の日は遅れ気味になるだろうって。どうやら天候が不安定になっているせいらしいぞ。ナッシュも風邪をひくなよ！

噂によると、〈天守り（グロナーシュ）〉が落ちたらしいな？　しかも落ちた場所は、守りの村に近いとか……？

これからどうなるか不安だが、どうってことはない、こっちのみんなは元気はつらつだ（もちろんかぼちゃもだぜ。かぼちゃはお前からもらった『魔導師アケラス　七色鳥を追って』を、もう何べんも読んでるぞ。ガルドもそらで言えるようになったくらいだ）。

学舎はどこになったんだろう？　お前のことがすごく気になってる。いつまでも元気でな、一番のナッシュ。いつでも遊びに来いよな！

守りの人　お前の〈育ての者〉　ピクランタ」

「はん！　ただのいいアベドかよ」チャルーは鼻を鳴らした。

「そうだね」

それこそが、クワーレンにとっての救いだった。「〈天守り（グロナーシュ）〉が守りの村に落ちたこと、ほんとうだったんだ」

村回りの最後となった師の村で、クワーレンたちはリトウアーラから〈天守り（グロナーシュ）〉の話を聞いたのだ。季節外れの大雪や寒波は、〈天守り（グロナーシュ）〉が落ちたのが原因だと。

その時、ばたんっ！と乱暴に戸が開けられた。外套から雨水を滴らせたイム

サが、重々しい足取りで入ってきた。
「きゃあ、泥棒！」
ペニャッツ酒でご機嫌なチャルーは、嘲るようにイムサに言った。だがイムサは、疲れたようにこちらを睨み、奥で見習い服から寝巻に着替えはじめた。
「ああ、なんてことだ。荷物が届かなかったんだな。可愛そうに。まあ、始終不機嫌なやつに贈り物が届かないのも無理はない」
チャルーの嫌味に、イムサは反応しなかった。クワーレンでさえもぴりついたのに、これは奇妙だ。チャルーは懲りずに続ける。
「仕方がない。陰気な野郎には俺のペニャッツ酒を分けてやるよ。俺ってほら、優しいからさ！」彼は、どうだとばかりに目の前でホルトを揺らした。「だが、借りは返せよ」
「馬鹿か。いらねえよ。俺はもう寝る」イムサは背を向け、掛け布団をかぶった。
クワーレンは、咳払いした。
「チャルー、ペニャッツ酒をもう一杯くれないかな」
チャルーは振り返って、「あんなやろうとこれから一緒だと思うと、窒息死しそうだ」と小声で言った。「クワーレン、俺に本を読め。いらいらしてしょうがない。だが、面白くないところはすっ飛ばせ」
クワーレンは、最後の一口を飲み干した。
「全部読むのがいいのに」
「俺はだめだ、飽きちまうから」
チャルーは、クワーレンからホルトを受け取ると、下へペニャッツ酒を注ぎにいった。
クワーレンは、イムサの背中を見た。彼は、身じろぎ一つしなかった。

「……〈野駆け〉さんのこと、考えてる？」
クワーレンが問うたとたん、イムサは舌打ちした。
「……村回りが最後までできなかったのは、ドナウト師のせいだ。あの〈野駆け〉がいなくなったのも、ドナウト師のせい。北熊（ノール）学舎に入舎できても、あの問題が解決したことにはならない」イムサは壁に向かって言った。
「学舎に入れば、もう〈目〉から狙われることはないだろ？」
クワーレンは、村回り中に巻き込まれた取引事件の恐怖を紛らわそうとした。村回りを率いたドナウト師は、別の師の人から頼まれた『資料』の翻訳の仕事から逃げるべく、隠れ蓑として村回りの引率についていたのだった。だが師の人たちは、ドナウト師にゆさぶりをかけるべく、〈目〉という存在を使ってクワーレンたち見習いを人質にすると脅した。それを知っていたのがイムサと〈野駆け〉という男であったが、師の村を最後に、ドナウト師も〈野駆け〉も〈目〉も、消えてしまったのだった。
「そういうことじゃない……」
〈野駆け〉のダーングが無事なのか知りたいだけだ。イムサは心の中で呟いた。〈野駆け〉の名前や素性を知るのは自分だけだが、それゆえにいっそう強いつながりを覚えた。彼を尊敬し、信頼していた。不安でおびえる自分を助けた救世主であり、秘密を共有する仲間だったのだ。だからこそ、挨拶もなしにすっかり消えてほしくなかった。
雨が窓を叩いた。そのざわめきは、なにかを伝えたがっているようだったが、イムサにもクワーレンにも、何一つわからなかった。

◆

次の朝、学舎行きの馬便が家の前に寄せられた。普通の馬便に比べると大きく、最大二十人乗れるのだと、御者はクワーレンたちに言った。今日も曇天で、凍てついた匂いのする風が丘を静かに流れている。見習いたちは外套を掻き合わせながら、馬便からの景色を眺めた。

学舎へたどり着くと、彼らは鉄格子の門を抜け、師の棟の扉を通り、中庭へ向かった。他の見習いたちは、迷うことなく自分たちの校舎へ入っていく。一年生のクワーレンたちは、ハイズデヒ学舎長の案内を思い出し、丸みのある校舎へ急いだ。

だが、一年生の教室がある一階は、だれもいなかった。

「さっそく休みか！　やったぜ」

チャルーは中庭に駆けだした。すると、階段のところで誰かにぶつかりそうになった。

「おや、忘れ物か？」ステラウル師だった。「そんなに急ぐことはない。今日必要なのは、身一つだからな」

彼は、颯爽と教室の一つに入った。見習いたちは蚤のように跳ねながらついていった。

「好きなところに座って。でも、あまり遠くには座らないでくれ。声を張らなきゃいけないからな」

教室には三人掛けの長机が、横に三つ、縦に四つ並んでいた。窓からは、開けた草地と雑木林が見える。マウリンがど真ん中の席に座ったので、それを囲むようにクワーレンたちも席に着いた。

ステラウル師は、使い古された歴史の教科書を彼らに与えた。「来年の一年生も使うから、落書きはしないでくれよ」と言った師は、一番最初に書かれている『エイネー叙事詩』について話しはじめた。二時間目は、外に出て、のんび

り庭を散歩したりもした。
「授業をしたいが、君らの到着とこちらの予定が合わなかったものでね」ステラゥル師は後で言った。「開始は他の見習いとそろえるのが規則であるから」彼は探るような目を見習いたちに向けた。彼らはどこまで村回り中断の真相を知っているのだ？　だが、だれもそれに気づかず、中庭の影に残ったわずかな雪を踏みしめて笑った。
そんな保育部屋の勉強会のような緩い日々は、学舎に入って三日目に終わった。彼らの教室に、村回りを終えた見習いが入ってくることになったのだ。クワーレンは、それを知ったとき、必死に祈った。
（どうか、ベルツゥじゃありませんように）
保育部屋時代の宿敵、蜘蛛。いまではベルツゥという名前だが、村回りで一度会った時、彼は変わらずクワーレンを目の敵にした。彼と同じ教室になるくらいだったら、見習い帽子を脱いだほうがましだ……。
入ってきたのは、少年三人と少女三人だった。ベルツゥは……、その中にいなかった。クワーレンは、ほうっと息を吐いて、机に伏し、見習い帽子の下の髪を掴んだ。
「たしかに、あいつの髪は輝いてるが、自分の寝ぐせを恥じるなよ、クワーレン」
隣に座るチャルーがこそこそ言った。クワーレンは何が言いたいのかわからず、ちゃんと新しい仲間を見た。
少年たちは緊張を隠すための薄ら笑いを浮かべていたが、三人の少女たちは『奇妙な組み合わせ』と言うほかなかった。蛇と獅子とおばあさん、とでも言おうか。目つきの悪い短髪の少女と、とても目を引く綺麗な桃色がかった茶髪の少女。彼女の背中まで流れるその髪は、たっぷりと艶に満ち、柔らかな風の

ようなうねりは、凛々しい鬣のように見える。彼女はきゅっと口を結び、力強い眼光を３０１５番地の見習いたちに向けていた。そんな彼女から一歩離れるようにして、老婆のような灰色髪をした少女が、背を丸めて立っていた。ぼうぼうの髪は見習い帽子をずり落としかけているが、それに気づけないほど、目に虚無が宿っている。

ステラゥル師が「どこでも好きな席に座って」と言う前に、獅子のような少女が笑った。

「だれ、この子たち」

悪意のある言い方だった。仲間の少年のうち出っ歯な一人がくすくす笑った。

「俺、一番うーしろ！」

「最初に村回りを終えた３０１５番地の見習いたちだ。仲良くするように」

ステラゥル師は言ったが、少女たちは、さっさと窓際に向かった。

クワーレンの席の横を新たな仲間たちが通り過ぎるとき、クワーレンはあることに気づいて彼らを振り返った。

あの灰色髪の子、村回り前に家の裏で見かけた子だ。「魔導師様に心臓喰われるぞー！」「あんた、もう戻ってこなくていいから！」と番地仲間たちにののしられ、追いかけられ、森に逃げていった……。

彼女は、一机分開けて、後ろに一人で座った。新たな仲間に、見習いたちは互いに目を光らせ、観察した。しかし、灰色髪の少女は、窓の雑木林、その向こうを眺めていた。

午後、ステラゥル師は見習いたちを図書館へ連れ出した。図書館は、確かにハイズデヒ学舎長の言った通り広大だった。本棚が林のようにならび、蟻の巣のように上下左右にいくつもの部屋があった。図書館の中央には時計塔がある。巨大なくぎの先が地面から突き出たみたいだ。先端の三つの面には、それぞれ

三種類の時計が付いていて、文字盤の時計と、水車が底の液体を汲んで回転する時計と、時間を音で知らせる笛時計があった。笛は円を描いて並んでおり、吹き矢のように外側へ突き出ている。チャルーが数えたところ笛は二十五本あり、「二十四時しかないはずなのに、ありゃ二十五本ある。作ったやつが馬鹿なのか、それとも二十四時しかないと思っている俺たちが馬鹿なのか？」と鼻を鳴らした。

ステラゥル師は歩きながら、歴史学やその他、一年生が読むべき本で何冊かお薦めを教えた後、図書館の使い方を教えてくれた。

「名前と学年、それと番地を、本の裏表紙に張ってある紙に書くのだ。そしたら……」

「わざわざそんなのやるアベドがいるの？」獅子の少女が、鼻でせせら笑った。ステラゥル師は、だが、今度は無視しなかった。

「ラーリエ、敬意を示せない者に、私が答える義務はあるのか？」

太い眉の下で、師の瞳は爛々と光った。見習いたちは、尊敬と畏怖の念から首をすくめた。ラーリエと呼ばれた獅子の少女は頬を赤らめ、顔をそむけた。灰色髪の少女が陰で少し笑ったのを、クワーレンは見逃さなかった。

見習いは、次の日からどんどん増えていった。まず七人、次の日には十二人増えて、クワーレンたちが入って七日後には、教室の席はほとんど埋まって、合計三十人になった。

そしてようやく、本格的な授業がはじまったのだった。

◆

エイネー文字というのは、初代女王エイネンナムがデイゴンネーに住んでいた頃に使っていたとされる実文字（アウシザットウ）から派生したのだと、教壇に立つ小さな年配アベドは言った。黒髪をてっぺんでぎゅっと縛ってお団子にし、膨らんだ体と唇を一生懸命動かして、師は続けるのだ。「実文字（アウシザットウ）は、今は廃れて使われていませんが、魔導師様だけが、魔法を使う時に使っているのです。だから、魔導師様は偉大なんです」

彼女はアマキン師といい、主に国語を担当した。生え際が張るほど髪をきつく縛っているので、クワーレンはいつも、前列の毛根を心配した。

アマキン師は続ける。

「文字のもとを知っておられ、また、それを自在にお使いなさる魔導師様は、世界すべての物体を司っていると言ってもいいでしょう。なぜなら、その物体を根源から示す言葉をご存知の魔導師様たちは、うわべだけの文字しか使わない我々よりも、深く対象を理解していることになるからです」

ぽってりとした赤い唇は、常に上下左右最大幅で動いた。隣のチャルーが負けじと豪快なあくびをする。

「私たちの文字で表せる言葉は、削ぎ落とされた簡易的なものでしかありません。例えばこの机ですが、魔導師様たちは、別の言葉、別の文字で言い表すことができます—詳しいことは、魔法学のファマエン師に訊ねてくださいね。そして魔導師様は、その対象の根源を示すことができる言葉を使うことで、対象を操作することができるのです。

言葉、その中でも、名前は偉大ですよ。名前がなければ、存在できませんからね。だって、どうやって名前のないものを呼べるんです？　呼べないでしょ

う?」
「ですが、匂いは名前がないのに、存在を知ることができます」
こういう、授業を真面目に聞いていて、かつ、頭のいい質問ができるのは一人しかいない。廊下側の一番後ろに座る少年、オクルだ。
オクルは、正直言って、頭が切れすぎていた。イムサと違って積極的な性格で、思ったことをすぐに述べる彼は、背が高くがたいがいいので一年生には見えず、クワーレンは近寄りがたく思っていた。彼の隣にいると、竜を見上げるトカゲの気分になるのだ。
「ええ、そうですね、オクルの言う通りです」
アマキン師は、短い首を動かして頷いた。
「ですが、匂いに名前はありませんが、それを示す言葉があります。太陽の季節の匂い、ルードルの照り焼きの香ばしい匂い、汗の匂い、土の匂い……」
オクルは頷く。教室の半分の見習いも、頬杖をついて、理解しようと瞬きする。残りの半分は(チャルーやマウリンなんかは)、白目をむいて眠気と戦った。
「ですが、例えば、これは有名な話ですが、アスハリエティク国では腰痛になる者がいません。なぜだか分かりますか? 実は、アスハリエティク国では、腰痛という言葉、名前がないんです。これは、つまり、名前がないものは存在を認知できないということを、大いに示している現象と言えます」
「そんなの、ありえる?」後ろでリリがぼそっと呟く。「アスハリエティクアベドは蛸なんだわ」
じゃあ、『生え際がきつきつで生じる痛み』に名前があったら、アマキン師も痛みを感じるようになるのだろうかと、クワーレンは生え際を見ながら思った。
「また、名前は、示すものが一つしかない場合、強い力を持つのです。例えば、そこのお嬢さんが……」

アマキン師は、真ん中に座るエネーリスを指した。
「もし『女の子』という名前だったらどうでしょう？　……ですが、女の子はいっぱいいますね？　この子を示すには弱すぎます。では、『姿勢のよい女の子』、もしくは、『髪の長い女の子』、という名前だったら？　それとも、もっと踏み込んで、詩的に『夜の川』という名前ならどうでしょう？　そうしたら、ずいぶん選択肢が減っていき、彼女自身につながっていきますね？　彼女を示す、強い名前になっていきます。名前というのはそういうものです。もし同じ名前の者がいたら、どこどこの誰々と付け加えなくてはなりません」
エネーリスは注目されて恥ずかしく、首をすくめて居心地悪そうにしていた。
「だから、唯一の名前とは、ずいぶんと希少であるがゆえに、価値も高く、力が強いのですよ」
アマキン師は眉を上げ、教室を見渡した。欠伸をするちょうどその時に目が合ってしまったクワーレンは、急いで歯を食いしばって、鼻の奥で押さえつけた。アマキン師は、意味ありげに頷いて見せた。

学舎の東側には、野外調理の施設がある。数個のかまどと食事席があるその場所では、一週間に一度、家政学の調理実習が行われた。
初めての実習の日、ある見習いが才能を発揮した。彼女は、課題の卵焼きを見本のような黄金色に焼き上げ、さらには、いくつか別の形の卵焼きも披露した。その見習いは、リリだった。
座学ではほとんどオクルが目立っていたが、新しい注目見習いが出てきて、

その変化にみんなは喜んだ。ずっと同じアベドが主役では、つまらなかったのだ。彼らは、リリにやり方を教わろうと、周りに集まっていた。

「ふん。ただ卵が焼けただけだろうが」

焦げたぼろぼろの卵焼きを浅鍋から皿へ削り落としながら、チャルーはリリをにらんだ。

「では、隣の見習いと料理を交換して！　お互いに味見をして、意見を言い合いましょう！」

家政学のカデナ師は、尖った鼻を上に向け、長い両腕を広げながら、晩餐会でも開くように、料理交換を宣言した。

よってクワーレンは、チャルーのぼろぼろ卵焼きを食べる羽目になった。舌にまとわりつく、じゃりじゃりした焦げ。その中に奇跡的に混じる、小さなふっくら卵の欠片。希少価値の高いその物体は、噛んでいる間に焦げの砂に埋もれて消えた。彼は咳き込み、急いで水を飲んだ。

隣でチャルーが、クワーレンの卵焼きを食べて言った。

「うん、卵の味だ。……うん、うん。……おい、クワーレン、ちゃんと塩入れたか？　あんまおいしくねえな」

「そうかよ、そうかよ」

リリとの交換相手はエネーリスだったが、マウリンも参加し、「ねえ、このお花の形のやつちょーだい！」とねだっていた。他の子たちも、一口欲しいだの、私のと交換して欲しいだの、大いに盛り上がっていた。

「すばらしい出来ですわね、リリ。私もいただいても？」

カデナ師も控えめにリリの卵焼きを指した。師のリリを見る目は、明らかに嬉しそうだった。

「ええ、カデナ師。どうぞ」

リリの方も、まんざらでもなさそうだった。はにかみながら、カデナ師に皿を差し出す。
卵焼きを口に入れたカデナ師は、しばし沈黙した後、大きく頷いた。
「大変結構よ。見習いのうちからこんなにできていれば、今後、あなたと住むアベドたちは幸福だわね。いい料理をする者は、心から歓迎されるから」
カデナ師はそう評価し、他の子たちの卵焼きも試食しようと、席を後にした。
「ねえ、料理が好きなの？」
言ったのはラーリエだった。親しげだったが、目には容赦ない光が浮かんでいる。
「……まあね」リリは答えた。
「ずっと前からこうなの？」
「え、何が？」
「だから、これよ。こんな風に前から作れたのって聞いてるわけ」ラーリエは、卵焼きをつつかんばかりに指さした。
「ああ、これ？　花の形はまず……」
「違うわよ、まったく……！　料理の経験があるのかって聞いてるの。どこかで習ったの？」
リリは、束ねた髪をさっと振った。
「いいえ、習ってない」
その答えに、周りの見習いたちは感嘆の声を漏らし、ラーリエの顔は真っ赤になった。リリは、彼らの反応に慌てた。
「違うわ。まったく習っていないわけじゃないわよ。本で学んだの！」
「へえ、本当？」
ラーリエは、リリではなく、隣に座るエネーリスに訊ねた。

エネーリスは、少しリリを見てから、「私は……、本で学んだかどうかは知らないけど、リリは昔から料理に詳しいわよ」と言った。「包丁の使い方も、とっても上手いの」

見習いたちから尊敬の声が上がった。反対にラーリエは眉を吊り上げ、リリを焼き尽くさんばかりに見下ろすと、席を離れた。

「俺の、ちゃんとまずかったか？」

後ろの少女たちのやり取りを見たチャルーは、体を戻してクワーレンに訊ねた。

「ああ。砂を食べてるみたいだったよ」クワーレンは頷いた。

「お前のも、布切れを食ってるみたいだった」

「失敗してよかったみたいだ。じゃないと……」

「ああ、あぶねえなあ。あの桃茶髪の女、前に出るやつには全員噛みつくつもりだ。嫌だねえ」

盛り上がる少女たちを再度ふりかえったとき、クワーレンは、反対の隅でこそこそ話す少年二人を見つけた。通路を挟んで隣になっているオクルとイムサだ。彼らは互いの卵焼きではなく、自分の卵焼きを食べていた。食べるのは皿を空にするためだけだというように、てきとうに口に運んでいる。彼らは、味よりも話す内容に注意を向けているようだった。

「まっ！ペニャッツ製造販売の話は、卵焼きの授業と関係あって？」カデナ師がぷりぷりして言った。

「いいえ、まったく」イムサが、涼しげな顔をして素直に認めた。

「料理はしっかり、互いのでしょうね？」

「ええ、もちろんそうですよ」オクルも同様に、涼しげな顔して頷く。

彼らは、息ぴったりだった。

入舎して二週間もすぎた頃になると、慣習が少しずつできはじめた。チャルーは一番最後に起きるとか、リリは食堂で出た料理を覚書きするとか、朝の迎えの御者がラーリエの番地に着いた際、「今日はどうした？」と問うとか。

「あとから行くって」「寝坊してるの」「口が臭いから会いたくないって」ラーリエは答える。この日は、「おなかが痛いんですって」と苛立たしげに言った。

「ご老体だからな！」

仲間である出っ歯の少年が、乗り込む際に笑って付け加えた。すると、馬便の見習いたちは、げらげら笑うのだ。もしくは、毎度のことに呆れて目を回したりした。

「しっ、ムオラー、そんなことを言うんじゃない。……ちょっと見てきてやらなきゃ。様子が悪かったら、薬の人を呼んでやらないと」

御者はしばらくを留守にしたが、やがて一人で戻ってきた。

「どうしたの？」マウリンが窓から顔を出して訊ねる。

御者は、頭を掻き、家を振り返った。「……や、まあ……。心配はいらない……」

「ほうらね。どうってことないのよ」ラーリエは腕を組んで言った。

「なにを偉そうに」後ろのリリが、ぼそっと呟く。

ラーリエは、かっと振り返った。

「うるさいわよ、料理人。あの子は心配することないって言ってるの」

リリは、怒鳴って言い返そうとしたが、隣のエネーリスが慌てて引き留めた。

「喧嘩を買うほどの相手じゃないでしょ」耳元で彼女は言った。

休み時間中、灰色髪の子を怪しんだマウリンが、「あの子はさあ、何してん

の？」とラーリエに訊ねた。「ぜんぜん学舎に来ないじゃん！」
「そうねえ、たぶん、床で魚を放し飼いにしているのよ」ラーリエは、教科書を机に叩きつけながら言った。
「魚！　なんで？」
マウリンの大きな声は、教室中の見習いの興味を引いた。一瞬のうちに、ラーリエの周りに見習いの輪ができた。
「魚を放し飼いってどういうことだよ？」目玉の大きな少年ジェライが言った。
「信じられねえ」と、嘲笑で目をぴかぴか光らせる。
ラーリエは、みんなに囲まれて嬉しくなり、得意げになって言った。
「言った通りよ！　まず、小魚を川からとってきて、床にべちゃっと落とすの。それで、跳ねてる魚を突っ立って眺めるのよ。おかげで家中水び出しなんだから！」
「動物虐待だ！」
「いかれた魚屋だ！」
見習いたちは、けらけら笑った。ラーリエは続ける。
「最初の日なんか、蛙を家中にばらまいたんだから。ね！　アシェキ？」ラーリエは、隣の仲間、短髪の少女に言った。
アシェキと呼ばれた彼女は、腕を組んで椅子にのけぞって座っていたが、頷いて体を起こした。
「そう。あの時は、まじで眠れなかった。だって、寝台の下に蛙がいるんだよ？沼でもないのに。安心して寝られっかっての。だからあたしら、『蛙を一匹残らず森に戻すまで、帰ってくんな』って言ってやったんだ。じゃないと、縁を切るってね」
「それは当然のことよ」誰かが訳知ったように言った。

「そういう子だから、おかげで私たち、毎日たーいへんなの。正直言って、あの子とこれからも一緒だと思うと寒気がするわ。学舎に来ないでくれたほうが全然いい。御者に休みの言い訳を作ってやってるだけでも、あたしたち優しいと思わない？」

ラーリエたちに賛同する声が広がる。

クワーレンは、それらを教室の端で聞いた。そして、アシェキが言ったのは、村回り初日のあの逃走劇のことだろうか、と考えた。

「ミニュメは、おばあちゃんなんだよ」

アシェキの声が飛んできた。「あの髪の毛を見たでしょ？　あの変な灰色の髪の毛。あたしたちが会った時からあんなんだったんだから。きっと、卵から孵った時から、すでに年寄りだったんだよ」

「ああ、あの髪は変だと思ってた」ジェライと他の子たちが頷いた。

「気をつけといたほうがいいよ。あいつ、何しでかすか、分かったもんじゃないからね」

「そうよ。つるまない方が身のためよ」

アシェキとラーリエは、みんなを危険から守る善なる者として、上から告知するように言った。

◆

それから数日後。雪や雨が降り続いて寒々しかった気候がゆるみはじめた。晴れ間の出る日が多くなり、太陽が戻ったことに喜びを隠し切れない様子で、

中庭の花々が一斉に色を振りまきはじめ、虫たちも景色の中に戻ってきた。天候が元通りになっているのかもしれない。

それを裏付ける知らせが、マウリンによってもたらされた。クワーレンたちは窓の外の景色を堪能しながら食堂で朝食をとっていたが、マウリンは慌ただしくやって来て、穏やかな雰囲気をぶち壊した。

「見て見て見て見て見て！〈天守り（グロナーシュ）〉は帰ったらしいよ！」

そう言って食事台に叩きつけたのは、見習い村で出回っている、よりどころ新聞だった。よりどころ新聞は、見習いの有志がつくっている新聞で、村中に無料でばら撒かれていた。よりどころ新聞という名前は、見習いのよりどころとなるような面白おかしい情報を発信しよう、ということでつけられだようだ。新聞の端っこに、四角で囲ってそう書かれている。

「この新聞って、見習いが書いてるんじゃなかった？　信用できるの？」クワーレンの向かいに座るリリが、野菜の炒め物をポウに挟んで言った。

「ええと、よく知ってるアベドが書いているってことでしょ？」マウリンはポカンとした。

「うわ。あんた、危ない一生を送りそう」リリは肩をすくめた。

「見せて」エネーリスが新聞を手に取った。

しばらくして読み終えると、彼女は顔を上げた。

「これ、すごいわ。作り話じゃないとしたら、この記者は〈天守り（グロナーシュ）〉を見たってことよ」エネーリスは、隣のリリに新聞を回した。「……マウリン、朝食は済んだの？」

マウリンは、興奮して、食事台に手をついて飛び上がっていた。

「食べた！　食べてない！　ね、だから言ったでしょ。あの天気の悪さは魔法

動物のせいだって！」
「うん、はいはい」リリは新聞を読みながら、顔を上げず答える。
「魔導師様との対決、見たかったなあ！　ああ、あたしも守りの村にいたら……」
「対決？ほんとか！」
チャルーは、リリから新聞をひったくろうとして失敗した。彼女は、口からポウのかすをこぼすチャルーを睨んだ。「殺したのか？」彼は言った。
「まさか！　そしたら、もっとひどいことになっていたはずよ」エネーリスが反論する。「魔導師様は、〈天守り（グロナーシュ）〉と対決した後、空へ送り返したって。ここに書いてあることはそんなことよ」彼女は、リリの横から覗き込んで言った。
「ん、まあ、よくできた新聞よ。……はい、読む？」リリは、新聞をクワーレンに回した。
クワーレンは、さっそく読んだ。

「見習いの諸君、朗報だ！　これからはもう、寒さに震えて見習い帽を目深にかぶる日々はなくなる。なんと、ついに一昨日、魔導師アリィア様の手によって〈天守り（グロナーシュ）〉が空へ帰ったのだ！　俺は見たんだ、間近でその戦いを。これからその詳細をここに記し、見習いの諸君にも、熱き戦いの一部始終を知ってもらおうと思う。心臓は、しっかり胸の中に納めておくように。飛び出さないよう、注意が必要だ。
一昨日の夕刻、俺の腹の虫は夕ご飯を告げていた。だが、俺自身は学舎の食堂におらず、村の中心で一番いけてるお店、『いっさいがっさい』にもいなかった。俺はそう、守りの村にいたのだ。

あーーっと！　そこで、曇天広がる育ての丘の向こう、そこで何かがいきなり光ったのだ。アベドたちのどよめき、女たちの悲鳴、子どもたちの泣き叫ぶ声。なんと、遠く、丘の稜線を越えた先に、丘よりももっと大きな水色の山が横たわっていた。ああ、信じられない。あれは先刻までなかったはずだ。おまけに、呼吸しているかのように上下に動いている……。アベドたちは口を覆い、唖然として、突如現れた青い山を見つめた。俺は、ただちに息する山へ駆けだした。守りの村十三番街を抜け、北ヤルル街道を左に曲がる。

そこで見つけたのは、長き髪なびかせる救世主、アリィア様の凛としたお姿だった。イェントルス海岸の空き地。アリィア様は、その砂の混じる荒れた草地に横たわる〈天守り（グロナーシュ）〉を前に、すっくと立っていらっしゃった。

俺のまわりでも、不安に駆られてやって来た守りの人らが集まり、固唾をのんで見守っていた。その時だった、〈天守り（天守り）〉が頭を持ち上げたのは。周りの空気が揺れ動き、あたりに緊張が走る。アリィア様は恐れることなく、だが慎重に、〈天守り（グロナーシュ）〉へ向かって歩みはじめた。俺たちはそのとき、何とも言えない〈天守り（グロナーシュ）〉の鳴き声に耳を塞いだ（注意、ここからが問題なんだが、耳を塞いでいる間に、お二方に何かあったようだ。この瞬間のことは、俺は今でも後悔している。いきなり破裂音がし、閃光がほとばしったのだ）。爆風で砂が舞い、俺たちの顔めがけて砂が飛んできた。魔法の熱を強烈に感じた。俺は一瞬だけ、ここに来たことを後悔した。今では読者のみんなにこのことを伝えられて、貴重な体験ができたと誇りを持って言えるが、とにかく！　恐ろしい瞬間だったんだ。

顔を上げると、あの青い山は消えていた。ゆるゆるとした砂ぼこりだけが舞っている。だが、空を見よ。尾をくねらせて湯気のように消えながら上ってい

く、〈天守り（グロナーシュ）〉のわずかな姿が見えるではないか！　そう、ついに、アリィア様は、お騒がせな〈天守り（グロナーシュ）〉を空へ帰すことに成功したのだ！

我々は歓声を上げた。白の季節を追い返し、花の季節を取り戻してくれた魔導師様に、我々は感謝の声をあげて駆けつけた。

外套を羽織り続ける暮らしは、こうして終止符を打たれた。もう花々の上に雪が覆いかぶさるという苦しい景色は、消え去ったのだ。（我ながら詩的な一文が書けたぞ）

（学舎三年　ユルクート）」

クワーレンが読み終わるか否かのところで、マウリンは詰め寄った。

「ねえ！　こんなことが本当に起こったんだよ、すごくない？　このユルクートってアベドは、本当にすごい体験をしたよ！」

「省略の仕方が雑」

「んもー、リリは黙ってて。……ねえ、クワーレンは信じるでしょ！？」

クワーレンは、頬を掻いて、隣のチャルーに新聞をあげた。「信じるよ。でも、リリの言いたいこともわかる」

「どうだっていいの！　これは、魔法動物がいなくなった、っていうのが主な内容なんだから、戦いが書いてあればいいんだよ！」

マウリンは言うなり、朝食を取りに駆けて行った。「落ち着きないわね」とリリ。

チャルーは、「……なんだよ、絵が描いてねえじゃないか」と、ルードルの手羽先を齧って、さっさとイムサに渡した。だが、彼が受け取った瞬間、チャルーは、「あ！」と叫んで、新聞をひったくった。イムサは舌打ちし、チャルーは

クワーレンに新聞を突きつけた。
「そうそう、俺、これやりたいと思ってたんだ！　競争！　一年から出られるってさ。なあ、一緒にやろうぜ！」
クワーレンは、彼の手を押しのけた。「何？」
書かれていたのは、『選手募集』と書かれている広告だった。チャルーは説明した。
「太陽の季節に、主（あるじ）の祭りがあるだろ？　そこでやる岩羊（いわひつじ）競争に参加できんだよ！」
「え、本気？」リリが驚いて言った。
「怪我人が出るやつよね。それ……」エネーリスも身をすくませている。
クワーレンも、その名前を聞いてぞっとしていた。
岩羊競争は、岩羊に乗って行われる障害物競走だった。岩羊は、どんくさい乗り手には容赦せず、後ろ脚を蹴り上げて落とすといわれている。自尊心が強く、高貴な動物である岩羊は、技術があって堂々としている者しか乗ることを許さないのだ。それゆえに、未熟者は怪我と泥にまみれるのがお決まりだった。
「いや、僕、岩羊には乗らないよ」クワーレンは尻込みした。
「え？　訓練期間が設けられてんだぜ。ほら見ろ、ここ。『誰でも上達、岩羊と仲よし講座あり』。……ん？『注意、競争に出る者はこの講座を必ず受けること』。ほうら、な、強制的に受けなきゃなんねえんだ。誰でもできるようになるって」チャルーは、新聞を食事台の縁に叩きつけた。
クワーレンは、自分が競争に出るところを想像した。
まず、熱狂的歓声、砂ぼこりの舞う広場、そこには高い壁が設けられ、一度入ったら門がしっかり閉じられる。逃げ場はない。そして目の前に並ぶ鉄の棒や平均台、極度にうねる道と泥沼、跳躍台、それらを見て気が動転し、乗って

いる岩羊の背中に生き物の感触を感じて、自分は焦りはじめる……。そうして岩羊は、開始の合図が出される前に、あまりの不安と侮辱に耐えきれず、自分を振り落とす。そして岩羊が走り出す前に、すでに自分は顔面から落ちているのだ。

分かってる。ありありと見えているぞ。そんな恥ずかしい光景が。

「いいや、僕は出ない」クワーレンは、ぶるぶる首を振って妄想を払い落とした。

チャルーは粘っこく、「え～なんでだよ」と言った。「見た事あるだろ～？　岩羊がどれだけいかした生き物か。あのごつい角、さらさらな青い毛……」

確かに、あのさらさらの毛には触ってみたいが……。クワーレンは唾を飲み込んだ。

「君は大丈夫だよ。けど、僕は嫌だ。きっと血まみれになって、青い岩羊を赤にさせちゃう」

チャルーの眉の端が、みるみる下がった。

「おいおい、俺を一人で行かせるのか？　なあ、今日の昼休みに説明会があるって書いてある。それだけでも行こうぜ？」

「けど、今日、本の返却期限日なんだよ。ほら、『尾骨獣の大戦』の番外編、読みたいって言って借りてきただろ？　あれを返す日で……」

「そんなあ！」

それを聞いて、リリがケラケラ笑った。

「行きなよ、一人で。あたしたち、観客席からあんたが泥だらけになるのを見てあげるから」彼女はにやにや笑って、手をはたいてポウのかすを払った。

「違うな。お前が見るのは、喝采だらけの俺だ」

「はいはい」

「ねえ、そろそろ一時間目がはじまるわよ」エネーリスが、食堂の時計を見て言った。

彼らは、朝食を食べる手を速めた。食器を片付けると、他の見習いとお喋りをするマウリンの姿を見つけた。

「マウリン！　食べたの？　遅刻するわよ！」

エネーリスに言われ、マウリンはやっとその場を後にした。「またね！」と手を振る。

「ちゃんと食べたの？」エネーリスが訊ねる。

「林檎のフーラッカンを一枚！」とマウリン。

始業の鐘が鳴った。みんなは走り出した。エネーリスだけは早歩きだった。どんなに時間が迫っていても、彼女は絶対に走らなかった。

「ねえ、クワーレン、図書館に行く用事、ある？」

飛び跳ねるようにして、マウリンが隣にやってきた。クワーレンは、ぎくっとした。面倒な予感がした。

「……行くけど」彼がしぶしぶ答えると同時に、「じゃ、ついでに借りてきてほしいの！『イリキーライの魔法動物ほのぼの日記』ってやつ！」と、マウリンは言った。ほうら、見ろ。クワーレンは的中したことをうんざり思った。

「なんだって？　長くて覚えられないんだけど！」

走って息切れしながら、クワーレンは叫んだ。だが、マウリンは飛び跳ねながら、どんどん離れていく。

「とにかく、魔法動物の本だよ！　さっき勧められたの。う〜！　絵がいっぱい入ってるんだって！」

マウリンは、そのまま一年の校舎まで跳ねていった。クワーレンには、反論の余地もなかった。

昼休み、クワーレンは、『尾骨獣の大戦　番外編』を持って図書館へ行った。本棚に遮られたくぐもった足音と、本と本が擦れ合うわずかな短音。図書館は穏やかな静けさに満ち、見習いの白い服が、本の林を幻影のように行ったり来たりする。

受付で返却し、クワーレンは、次に借りる本を探した。

中央の時計塔までくると、彼は生物学の棚を探索した。マウリンの本がついでに見つかればいいと思ったのだ。それほど本気ではないが、ぬいぐるみのナラナラで首を絞められるのも困る。

山犬や蛙、岩羊など、一般の生物の本が並んでいる。魔法動物の文字は見当たらない。

クワーレンは、岩羊の本を手に取って開いた。競争の絵が描いてある。アベドがの背中から落ち、観衆らが口を覆い、驚き、笑っていて……。

彼は、急いで本を閉じた。

奥へ行き、二階への階段を上がる。ふわっと明るい外光に迎えられ、クワーレンは目を細めた。中庭に面した窓から、午後の優しい光が入りこんでいた。

窓側の棚に並ぶ本の背を軽くなでながら進む。埃っぽく、布だったり、皮だったり、箔押しだったり、感触はそれぞれだ。『内世界現象録』、『実文字（アウシザットゥ）からの派生語一覧』、『歴代魔導師辞典』等々、どうやら魔法学の本棚のようだ。頭が痛くなるような題名ばかりだが、そのせいなのか、二階にとどまるアベドはほとんどいなかった。

だから、クワーレンが本棚の裏に回って灰色髪の少女を見つけたとき、息が

止まるほど驚いた。少女は見習い帽子をかぶっておらず、灰色の髪は重力に逆らうように四方八方を指していた。

こちらに背を向ける彼女は、クワーレンには気が付かず、ゆっくり歩き去っていった。ここの監督者であるかのように、後ろに手を組みながら。

彼女—ミニュメは、今日の授業に一つも参加していなかった。それどころか、朝の馬便にも乗ってこなかった。

（いったいいつ、どうやってここに来たんだろう？）

クワーレンは、彼女の去った方へ向かったが、もう姿は消えていた。

（野良猫みたいだ）

気を取り直して、マウリンの本探しを続けた。棚の上から下までざっと見る。なんとかのなんちゃら日記は見当たらない。

魔法学の棚を一通り見て、クワーレンが諦めかけたその時、ばんっ！　と後ろで本が落ちた。

振り返ると、厚手の本をミニュメが拾い上げていた。

「……ごめん」彼女はぽつり謝って、本を棚にしまった。

「いいよ」

いつの間に後ろにいたのだろう。不思議に思うクワーレンのことを、ミニュメの方も、何か変なものでも見るように、頭からつま先まで眺めていた。

「えっと、何？」

「あなた、同じ教室の子？」

「そうだよ、クワーレンだ」

ミニュメは、わずかに眉間に皺を寄せ、斜めに小さく頷いた。いい反応ではなかった。

「なにかまずいの？」とクワーレン。

ふるふるとミニュメは首を振り、目が髪の毛の中に隠れた。
話をしたくなさそうだと思い、クワーレンは本探しを再開した。だが、ミニュメはそこに居続けた。
「魔法動物が好きなの？」消え入りそうなかすれ声で、彼女は訊ねた。
「僕じゃないんだ。番地仲間に頼まれていて……。なんとかのなんちゃら日記ってやつ」
『『イリキーライの魔法動物ほのぼの日記』？」
ぎょっとした。クワーレンが驚いて頷くと、ミニュメは端まで行って、本棚の最上段を指差した。
五巻の続き物になって、『イリキーライの魔法動物ほのぼの日記』は並んでいた。
「わあ、ありがとう」
クワーレンは礼を言い、本を取ろうとした。が、背が足りなかった。指先が本のお尻をかすめる。すると、ミニュメはどこかへ走っていき、椅子を持ってきた。
「ああ。ありがとう」クワーレンはまた言った。
本を取っている間、彼女は椅子をおさえていてくれた。
「ありがとう」
降りた後、クワーレンは合計三回も、彼女に礼を言った。
灰色髪の少女は、笑みを浮かべた。「いいよ」彼女は言い、自分の髪をつまんだ。「気になる？」
クワーレンの頬は熱くなった。正直、気になっていたのは事実だ。けれど、言われて恥ずかしくなった。
「まあ。でも、無理に話さなくていいよ」クワーレンは言った。

ミニュメは、ぽかんと口を開けた。そして、けらけら笑いだした。
「ううん、話したくないわけじゃないよ。どっちかっていうと、誰かれ構わず言っちゃいたいね。だって、すごい話なんだもん」
「そうなの？」
「そうだよ」ミニュメは、にやにや笑った。「聞きたい？」
クワーレンは、頷いた。ミニュメの瞳は、はじめて輝きだした。彼女は本棚に寄りかかった。
「あのね、小さい時のことなんだけど、ある魔法動物に、あたしの髪を欲しいって言われたんだ。髪の毛じゃないよ。髪の色が欲しいって言われたの。だから、あげたんだ！」
「あげた？　色を？」
「そうだよ」ミニュメはきょとんとした。「なんだ、もっと驚いてくれるかと思った」
「驚いてるよ。でも、もっとちゃんと話してくれないと、よくわからない」
「ああ、ええと、ね……」
ミニュメは、言葉を探すように、目をあちこちに向けた。
「うーんと、保育部屋にいたとき、森で魔法動物に会ったんだ。その子とは何回も会って、そこから、うーんと……仲良くなって……。その子は、だいぶ恥ずかしがり屋でね。それに、めっちゃ自分のことを気にしてた」
彼女の語りはあまり歯切れがよくなかったが、クワーレンが「それで？」と問うと、笑みを深めた。
「うん、あのね、その子、自分に何か足りないと思ってたのね。だから、別のもので補おうと思ったの。それが、あたしの髪の色だったわけ。つまり、この髪の色は取られたわけじゃないんだよ。あたしがあげたの。彼が欲しいって言

ったものを、あたしがあげた、それだけ。お互いに、『いいよ』って言ったんだよ」

ミニュメは頷き、じっと、クワーレンの反応をうかがった。

「どうして色をあげたの？」クワーレンは、ぶつけるように訊ねた。

「欲しがったから」

「君は、いらなかったの？」

「髪の色？　うーん、あたしよりも、彼の方が欲しがってたし」ミニュメは、首を傾げた。「なんで？」

「だって、君はそのせいで、いろいろ言われてるじゃないか」

彼女は、「ああ……」と頷いた。「でも、あたしは、あの子たちより彼の方が好きだよ。だから、別に後悔してない。あの子たちは、まあ、確かにうざいけど……」

「だから、朝の馬便に一緒に乗らなかったわけ？」

ミニュメは、はっと顔を上げ、あははと笑った。

「あれは、起きるのがめんどくさかったから。でも、たしかに、あの子たちと一緒の馬便に乗るくらいなら、寝坊した方がはるかにいい。とにかく、そう、あたしは魔法動物に髪の色をあげたんだからね！」

「ふうん」クワーレンは、上の空の返事になった。「その魔法動物の名前って、なんていう……」

だが、ミニュメは聞いていなかった。彼女は、うふふと楽しそうに飛び跳ねながら去っていった。もうクワーレンなんかどうでもいいみたいだ。彼は呼び止めようと思ったが、やめた。

ミニュメは、風のようにとらえどころがなかった。もしくは、本人が捕われたくないのだと、クワーレンは考えた。だが、一つわかったのは、ミニュメは

もともと老婆ではなく、魔法動物と関わった変わり者だということだった。

◆

ミニュメのことを、クワーレンは無意識に昔の自分と重ねていたようだ。彼は次の日の夜、ものすごい恐怖を感じて飛び起きた。

寝巻きが汗でへばりつき、気持ち悪い。部屋の壁が迫ってくる感じがして、胸が苦しかった。

夢の中で、クワーレンは、草原を走っていた。行く先は、天を指すようにしてそびえる白い崖だ。

「呪い野郎！」

波のようにして、何百の罵倒と拳が後ろに迫ってくる。クワーレンは、息も絶え絶えに、必死に走り続けた。

すると、隣に根っこを動かして走る大木がやって来て、クワーレンを取り囲んだ。枝の腕を広げて覆いかぶさる。灰色の幹。あたりが影となり、暗闇がクワーレンを包む。

「あなたを、守ったわ……」

木は言った。葉が擦れ合う音が、何重にもなってこだまする。

「守った、守った……。じっとして、じっとして……」

クワーレンは縮こまった。木の言う通り、じっとしていた。安堵がやってくる。

気づけば、学舎の図書館を歩いていた。ここでは、自分を本棚が隠してくれ

る。安全だ。そう思った。だが、次の瞬間、本棚が灰色の木に変わった。何体もいて、クワーレンの周りを、根っこの足を動かしながら踊りはじめた。

彼らは、叫んでいた。耳を引っ掻くようなその悲鳴に、クワーレンは、うずくまって耐えるしかなかった。

叫び声は、これ以上ないくらい甲高くなっていく。

「クワーレン？」

叫び声の向こうから、槌を振り下ろすようにして、誰かの声が聞こえた。誰だろう？　けれど、ここに来てはいけない声だ。この場所は自分の秘密。誰かに知られてはいけない！

「だめだよ！　こっちに来るな！」

「クワーレン？　……クワーレン！」

はっとして目をあけると、寝台の脇で、チャルーが訝しげに見下ろしていた。頭上の窓から、朝日が差し込んでいる。壁、布団、チャルー、光……。３０１５番地だ。どうやら、また眠ってしまったらしい。

「もうすぐ学舎の馬便が来るぜ。急げよな！」

チャルーは、ぼうっとしているクワーレンの肩をどつくと、見習い服に着替えにいった。

だが、クワーレンが一向に動き出さないので、また戻ってきた。

「おい、なんだよ。死人みたいな顔して。今日の一時限目が徒競走だからか？大丈夫、この前の授業ですっころんだことは忘れてやるからよ」

「そうじゃない。でも、ありがと」

「馬の糞で滑って顔面強打だもんな。無傷もすごいが、一日中あの匂いをまき散らしてたのもすごかった」

「おい、忘れてくれるんじゃなかったの」

「俺が言いたいのは、今回も期待してるってことだよ。お前、足は早いのに、どこか抜けてるんだよなあ」

げらげら笑うチャルーを小突き、クワーレンは衣装箪笥へ向かった。見習い服を取り出し、寝台に放り投げる。

部屋の外で、ばたばた駆け回る音がした。リリとマウリンが何か喚いている。エネーリスが「もう馬便が来てるわ！」と玄関外から言った。

仲間の騒がしい声が、今はほっとする。クワーレンは、朝が来たことに感謝した。

しかし、クワーレンはなかなか授業に集中できなかった。今朝の夢の名残が頭にあって、気分が晴れない。どこからか、あの灰色の木たちが現れるような気がして怖い。それに、眠くてたまらなかった。徒競走なんて、もはや雲の上を走っている気分だった。馬糞は踏まずに済んだが、地面を踏んでいる感覚がなかった。

それに、今日は特段に風が強かった。木はざわめき、雲は流れ、午後になると日は翳った。それが、クワーレンを余計、夢の中の怪しい気分にさせた。

四時限目。図書館での歴史学の授業中、クワーレンは、チャルーとイムサとで、一つの円卓に集まって、調べ物をしていた。ステラウル師が出したお題を、本で調べてまとめるという授業だ。クワーレンたち三人は、昔のアベドの動物利用方法について調べていた。

チャルーは、筆記具であるテキ（堅めの木炭を、専用の金属容器に入れたもの）を鼻に突っ込んで、ふんっ、と飛ばす遊びを二十三回もやっていた。そん

な彼を目に入れないよう、隣のイムサは黙々と、紙に本の内容をまとめている。
クワーレンも、『ハールン牛の皮の活用法』という本の内容をまとめはじめていたが、「ハールン牛の皮の活用方法について」という一文からなにも進んでいなかった。
その時、窓から強く風が吹き込み、あたりを一瞬大騒ぎにした。本がめくれ、紙が舞い、見習いたちは、わあわあ叫んでそれらを抑えた。ステラゥル師は、冷静に窓を半分閉めた。
イムサがそこで、本をばたんと閉じた。
「てめえら、やる気あんのか」
「もともとないこと、分かってるだろ？」
チャルーの言葉に、イムサはこれ以上ないほど恐ろしい形相をした。
「今、頑張ってるんだよ」
眠たいクワーレンは、精いっぱい言った。イムサは、クワーレンの紙をちらと見ると、「ああ、素晴らしい出来だな」と皮肉たっぷりに言った。
「……ねえ、僕ら、君ほど頭の回転はよくないんだ。これでも真剣なんだよ、気持ちは」クワーレンは、欠伸を噛み殺しながら、本の表面をテキでつついた。
「クワーレン、今、僕らって言ったか？　そりゃ、俺も入ってるってことか！」
チャルーは飛び上がった。
イムサは、じろっと二人を睨んだ。
「哀れなやつらだ。ハールン牛のほうがよっぽど役立つぜ」
彼は、苛立たしくテキで机をたたいた。「お前らが終わらねえと、俺も評価されねえ。合同作業、連帯責任、万々歳。お前ら、皮をはがされて敷物にされたくなけりゃ、俺の言う通りにしろ。……ここを書け。あとここも。だいたいでいいからやっちまえ」

「なんだ。書くだけならお前がやれよ。俺は、図を描く担当だ」チャルーは椅子の背にもたれた。
「なんだと、誰が決めた？」
「俺だよ」
イムサの虎色の目は怒りで煌めいた。彼は、がたんっ！　と椅子を鳴らして立ち去った。
クワーレンは、眠い目を開けながら、素直に言われた箇所を写した。『ハールン牛とは、もともとエイネーの西部の平原に生息していた生き物で……』
「なあ、なあ！」
クワーレンは顔を上げた。しかし、チャルーが呼びかけていたのは、後ろの円卓に座る少年たちだった。
「放課後、『いっさいがっさい』に行かねえか？　ウルダラクが刃物投げをするんだってよ！」
クワーレンは、驚いて眉をひそめた。誰だ、ウルダラクって？　『いっさいがっさい』なんて初耳だ。
「ああ、もちろん、そのつもりだよ。お前も誘うつもりだったんだあ、チャルー！　絶対、刃物投げとか好きだろうって、ガルシュと話してて……」
そう言ったのは、目がくりっとしていて、童顔の、トルーヤという少年だった。そばかすだらけの顔に、いたずらっ子な笑み。まるで飴玉みたいな子だ。微笑む口からは、八重歯が覗いている。
トルーヤの言ったガルシュというのは、彼の目の前に座っている、ばさばさの黒髪に灰色の目の少年で、チャルーが会話に入ってきて喜んでいた。肘をついて、「チャルー、鼻テキ飛ばし選手権やろうぜ」と、テキを鼻に突っ込む。
クワーレンは、しばらくハールン牛について書いていたが、チャルーたちが

盛り上がるにつれて、筆が遅くなった。机を叩く音、足を踏み鳴らす音、テキが鼻から発射される音。それらがざらめいた音となって、クワーレンの周りに壁を作る。

我慢ならなくなった彼は、席を立つと、本棚の林に逃げ込んだ。

本棚の間に満ちる静寂は、クワーレンを一時、開放的な気分にさせた。ここで鼻くそをほじろうが、誰も気づかないだろう。

歴史学の本棚へ向かうと、イムサを見つけた。彼は地面に胡坐をかき、膝小僧が隠れるほど大きな本を熱心に読んでいた。

クワーレンが近づくと、彼は顔を上げた。

「なんだ、黒毛のハールン牛。終わったのか？」

「いいや」

「とろいやつだな。何しに来たんだ」

「金色のハールン牛が別の牛と騒ぎはじめたもんだから」

イムサは耳を澄まし、遠くのチャルーと少年たちの笑い声を聞いて、肩をすくめた。

「自ら皮を剝がされにいっているのか、師に同情するよ、解体が大変だろう」

イムサはそう言うと、本にまた目を落とした。

「それは？」クワーレンは、彼が読んでいる本の挿絵を指した。

二、三人のアベドたちが、森の中で、青い色をした生き物と取っ組み合っている。その生き物は、手と足に鋭い爪を持ち、歯は長く、目は黄色、背中に蝙蝠のような翼を持っていた。それ以外はアベドにそっくりで、ごわごわとした紺色の髪の毛まで生えていた。

アベドたちは槍を持って、その青い生き物と戦っている。青い生き物は、怒ったような顔をして、赤い舌を出し、アベドに向かって叫んでいた。

「竜人狩りだ」

イムサは頁(ページ)をめくった。

「昔の話だ。けど、竜人狩りが禁止されたのは、たったの三十年前なんだぜ」

彼はまた頁(ページ)をめくった。「それまでは合法的にやっていたんだ。すげえ話だよな」

「竜人って、まだいるの？」

イムサは、前に頁(ページ)を戻すと、読むようにと、クワーレンに本を傾けた。

クワーレンは、地べたに座り、受け取って読んだ。

「竜人とはエイネーの昔より住む、魔法動物の一種である。一般的な魔法動物と違い、〈現(げん)〉を主な生活場所とし、〈現〉の大型草食動物、または、山犬などの肉食動物も捕獲して食べるという記録が残っている。大変な頭脳の持ち主で、知能が高く、エイネー語を用いて意思疎通が可能であることが、第二十三代魔導師ローリアクテアによって発見された。彼らは、向かい合った相手の、しばらく先に起きる出来事が見えるとされ、占いとしての見世物が大いに流行った。王家、の助言役としても使われた話は有名で、ヴァンサと名乗る竜人、通称『青っ子』は、竜人の中でも一番名の知れた一人である。

かつて竜人は、その容貌から、恐ろしく、野蛮な生き物であると認識されていたが、その美しい鱗や、角、翼などが装飾品として出回るようになってからは、考えが改められるようになった。彼らの角や翼には強力な魔力が込められており、他の魔法動物を寄せ付けない、いわゆる魔法動物除けとして、高値で取引されることが多かった」

チャルーたちの笑い声が止んだ。どうやら、ステラゥル師がお説教をはじめたらしい。師の低い声が、ここまで聞こえる。

「竜人は、魔法学では別名、森の翻訳者とも呼ばれる。生まれた時は青い肌に微小の柔らかな鱗が生えており、その鱗は成長するにつれて体を覆うように大きく広がっていく。目は明るい黄色から橙、褐色など様々で、大きさはなんとアベドの一・五倍はある。成長するにつれ耳は鋭くとがり、後頭部から二本の角がまっすぐ後ろに向かって生える。頭頂部にあったは背骨にそって生えはじめ、尾も太く長くなり、鱗は鍛錬されたズァーリーピ（近海でもっとも硬度の高い金属）をはじき返すほど固くなる。よって、成竜化した竜人は傷をつけることが難しく、過去は若い竜人たちを対象に捕獲が行われてきた。成竜化に近づくと、竜人は昏睡状態に入り、巣穴で完全な変身を遂げる。成竜となった竜人には背中に竜特有の翼が生え、大空へ向かって、巣立ちをする。

彼らは最近まで、装飾品のために乱獲がされていた。そのため今では姿を見ることが大変難しくなっている。竜人種族の絶滅を危惧した魔導師ノゥアが竜人狩り禁止令を出したのは、今からおよそ三十年前の話である」

イムサは隣で別の本を読んでいた。クワーレンは読み終わると、本を閉じて彼に返した。

「興味深い話だよな。だって、つい最近まで、意思疎通可能な種族を刺して売っていたんだぜ？　驚きだ」イムサは本を受け取るや、そう言った。

「だけど、終わってよかったよ。こんなの……嘘みたいだ」クワーレンは手をこすった。

「なに言ってんだ、馬鹿。嘘なわけあるか。ここにあるのは真実だけだ」

イムサは叫び、好奇心と興奮で目を輝かせた。「三十って言うと、ステラゥル師はきっと竜人狩りのこと知ってるだろう。これを知っているアベドが、まだたくさん生きてるんだ。不思議な感じだ……」

イムサは、また本の続きに戻った。淡々と文字を追うその姿は、とても楽しそうだ。イムサにとって知識を得ることは、素晴らしい食事をするのと同じように、堪らなく深い喜びをもたらす行為なのだろう。

クワーレンは、しばらく本棚を眺めていたが、やがてそこを去った。

窓際までいったとき、物悲しい風鳴りを聞いた。まるで悲鳴のようだ。それでふと、夢を思い出した。灰色の木が覆いかぶさり、周りで踊り狂う……。クワーレンは怖くなった。

慌てて円卓のところに戻ったが、そこにはもう、クワーレンの席がなかった。ガルシュとトルーヤが占領し、チャルーとひそひそ話をしていた。クワーレンは、後ずさりした。

学舎に入ってからというもの、みんなそれぞれ自分の場所を見つけて楽しんでいる。リリは料理、マウリンはだれとでも話をするし、エネーリスは師や校則に従順であるよう努めているし、イムサは変わらず読書、チャルーは、店に行こうと誘ってくれる友人がいる。クワーレンは、自分が取り残されているような気がした。

また保育部屋の頃のように戻るのだろうか、いつまでも一人だったあの頃に。冷たい悲鳴が、クワーレンを取り囲みはじめた。